とある魔術使いと禁書目録

オトモネ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
とある魔術使いと禁書目録

【Ｎコード】
Ｎ２１４０Ｔ

【作者名】
オトモネ

【あらすじ】
聖杯戦争は終わったが、英霊エミヤは座へと帰ることができなかった。上条当麻に憑依したエミヤはその身に降りかかる困難の数々を打破できるのだろうか？

#0　プロローグ（前書き）

はじめまして、オトモネといいます。

この二次小説はＦａｔｅ×禁書のクロスオーバー物です

今回初めて投稿しました。文才の無い私では、自己満足なオ●ニー小説になりそうですが、誰かに楽しんでいただければと思います。

週１～２ぐらいのペースでの投稿を予定しています。

どうぞよろしくお願いします。

#0　プロローグ

聖杯戦争は終わった。ギルガメッシュを倒したのが自分ではなく、あの小僧であるのには

些か不満であったが・・・。だが、奴は俺に勝った。認めるしかあるまい。

そんなことを思いつつ、目の前の女性に目を向けた。

「大丈夫だよ、遠坂。俺もこれから頑張っていくから・・・・・」

そう言って英霊エミヤは光の粒子になり、座へと帰っていった。

・・・・・はずだった。

＜エミヤｓｉｄｅ＞

今回の聖杯戦争で得たものは何だったのか・・・・。

消え行く意識の中、エミヤはそんなことを考えていた。間もなく己が消滅するというのに

恐怖の類は感じなかった。俺は変わることができた・・・。当初の目的は達成できなかっ

たが、これはこれで悪くない・・・・。

「またいつか、遠坂に逢いたいな」

そうつぶやき、自身の消滅に身をまかせるよう目を閉じた。

しかし、いつになっても俺は消えない。

「何か不具合が・・・・・っ！！」

不意に身体の落下を感じ、身構えるが状況は変わらない。だんだん視界が霞んできて、

最後に頭をよぎったのはお馴染みの台詞。

「・・・なんでさ・・・」

そこで俺の意識は暗転した。

#0　プロローグ（後書き）

誤字脱字等あるかも知れません。

アドバイス、感想等々よろしくお願いします。

#1　知らない天井（前書き）

どうも、オトモネです。
今更ながら創作の大変さを実感しています。
駄文ですがどうぞお付き合いください。

#1　知らない天井

＜エミヤｓｉｄｅ＞
突然だが、俺の名はエミヤだ。世界と契約し、守護者として世界の危機を原因ごと破壊してきた。「世界を守っている」といえば聞こえはいいが、要するに世界の意のままに動く掃除屋のことだ。今回は聖杯戦争にアーチャーのサーヴァントとして召喚された。当初の目的は達成できなかったが、こんな結果を受け入れている自分がいる。聖杯戦争が終り、聖杯が破壊された今、本体ではない俺には消滅する運命がまっているはずなのだが・・・

「知らない天井だ・・・・・・」

そっとつぶやいてみる。気がついたとき、俺はベッドに寝ていた。部屋の内装からして病院ではないだろうか・・・。しかし、おかしな話があったものだ。英霊が病院の、それもベッドに寝かされて、包帯まで巻かれているのだから。

天井に向けて手を伸ばし、閉じたり開いたりしている途中で、俺は奇妙に思った。俺の手はこんなにも白かったのだろうか・・・・・・。まるで昔の、今は

もうほとんど忘れてし

まっている、人間だった頃の自分の手を見ているようだった。

「そんなバカな・・・」

何がなんだか理解できず、呆然とした顔をしていると、突然病室のドアが開かれた。

「おや、気がついたのかい？具合はどうかね？」

ドアのほうを見ると、なんと言うか・・・カエル顔の白衣の男がこちらを見ていた。

「あなたは？」

普段の口調は使わず、相手が不愉快にならないように話しかけてみた。

「わたしかい？わたしはただの医者だよ。突然で悪いが君に聞きたいことがあるのだが・・・」

「何でしょう？」

「君は自分の名前を覚えているのかな？」

カエル顔の医者はこう切り出した。

「・・・質問の意図が分からないのですが・・・」

そのときの俺は、不覚にも自分の体が、見知らぬ少年のものと変わっていることに気がついていなかったのだ。

「はっきり言おうか。君の脳の一部は壊れてしまっているんだ。したがって、今の君には今までの記憶は無い。違うかい？」

衝撃の事実を知ったはずなのに、俺に動揺は無かった。

「先生、すみませんが鏡を持ってきてくれませんか？」

「ん？鏡かね？鏡ならここにあるよ」

先生が手渡した鏡を見て、俺は言葉を失った。

「これが・・・俺？」

鏡に映っていたのは、頬にガーゼを貼り、頭に包帯を巻いた黒髪の少年だった。

見覚えの無い顔、俺の顔でも、あの小僧の顔でもない。では、俺はいったい誰なんだろうか？

そんな哲学的な問答を繰り返しても意味がないと気がついたのは3分後だった。体が若く

なった分、俺の挙動も変化しているのか？いやいや、1度負けたとはいえあの小僧に、昔

の自分に戻るのはいやだ。落ち着け！落ち着くんだエミヤ！

俺が沈黙してから5分後、先生はもう1度聞いてきた。

「結局、君は自分のことがわかったのかい？」

どう答えればよいのだろう？たしかに自分のことは分かっている。俺はエミヤだ。

しかし、外見が違う。世に言う憑依というやつか？だとしたら、周りの人間にとって「俺」

は「エミヤ」ではない・・・。

「あの、俺は誰なんですか？」

「結論にえらく時間がかかったね。何か思うところがあったのかい？」

「えーと、それより俺は・・・」

「分かっているよ。君の名前は上条当麻。学園都市の高校1年生だ」

「学園都市？」

「そこから説明が必要なのかい？まあ構わないが・・・」

そういうと、先生は説明を始めた。

「学園都市は、東京西部に位置する完全独立教育研究機関のことだ。東京都のほか神奈川県・埼玉県・山梨県に跨る円形の都市で総面積は東京都の約３分の１に相当する。総人口は約２３０万人だ。ここまでで質問はあるかな？」

俺は首を横に振った。

「この都市は、あらゆる教育機関・研究機関の集合体であり、必要な生産・商業施設や各種インフラも都市内に完備されている自己完結した都市なんだ。最先端の科学技術が研究・運用されていて、都市の内外では数十年以上の技術格差が存在しているよ」

記憶、いや記録の上では学園都市なるものを俺は知らない。となると、ここは未来なのだろうか？まさか平行世界では？

「どうしたのかね？まあ驚くのも無理は無いが・・・」

「いえ、大体のことはわかりました。とりあえずここがどこで自分が誰かが分かれば何とかなるでしょう」

「えらくポジティブなんだね、君は。まあ、思いつめてもどうなるわけじゃないから一先ずは体を直すことを優先しようか」

そういって立ち上がると先生は

「そういえば君宛の伝言があったが・・・まあ今日は休みなさい」

そう言って俺の病室から出て行ってしまった。

#1　知らない天井（後書き）

次回からインデックスさんに出てもらおうと思います。

感想、アドバイスなど、よろしくお願いします。

#2　再会？いいえ、はじめまして　（前書き）

前書き　どうも、オトモネです。
お話って難しいですね。
できる限り早く投稿していきたいと思います。

あと、読んでくれる皆さん、本当にありがとうございます。

＃2　再会？いいえ、はじめまして

〔学園都市内　とある病院〕

ある病室の前に一人の少女が立っていた。年齢は１４歳ぐらいだろうか。

服装も特殊で、白い修道服に安全ピンが多数付いている。

意を決したのだろうか、少女はドアをノックして中からの返事を待った。

＜禁書目録ｓｉｄｅ＞

コンコンッとノックしてみる。

（とうまなら、きっと大丈夫なんだよ）

部屋の主から返事が来るまでの間、インデックスは心の中でそうつぶやき続けていた。

「どうぞ」

扉を開け、中に入ると、見知った男が窓の外を眺めていた。

「とうま・・・・」

そう言って男に駆け寄った。やっぱりとうまは大丈夫なんだと思っていた。

「あの・・・・・・あなた、病室を間違えていませんか？」

ショックだった。期待は裏切られ、インデックスの頬を何かが流れた。

目の前の少女が突然泣き出したのに男は動揺した。

「えーと、大丈夫か？何かとても辛そうだが・・・」

「・・・ううん、大丈夫だよ。大丈夫に決まっているよ」

「ひょっとして俺たちって知り合いなのか？」

「・・・とうま、覚えてない？私たち、学生寮のベランダで逢ったんだよ？」

「俺、学生寮なんかに住んでたのか？」

「・・・とうま、覚えてない？とうまの右手で私の〔歩く教会〕が壊れちゃったんだよ？」

「歩く教会って何だ？教会のミニチュアセットのことか？」

「・・・とうま、覚えてない？とうまは私のために魔術師と戦ってくれたんだよ？」

「っ！！！」

男は「魔術師」という単語に反応していたが、インデックスは気が

つかない。

「・・・とうま、覚えてない？インデックスはとうまのことが大好きだったんだよ？」

「・・・すまない、インデックスって何だ？俺、ペットでも飼ってたのか？」

「・・・・・・っう・・っひっく・・・・」

この言葉を聞いたとき、インデックスは堪えきれなくなって、また涙を流した。

＜エミヤｓｉｄｅ＞

病室に入ってきた女の子は、どうやら上条当麻の知り合いらしい。

女の子との会話から、上条当麻は学生寮に住んでいることがわかった。歩く教会がどうと

か言っていたが、修道服からして、この子は教会関係者なのだろうか？

彼女の口から「魔術師」の名が出たときは、不覚にも動揺してしまった。

そして、魔術師に襲われたというこの少女は一体何者なんだろう？

そんなことを考えつつ、会話をしていると、話の中に「インデック

ス」というものがでて
きた。インデックス？目次？いやいや、目次が俺のことを好きだな
んて言わないだろう・・・。
インデックスとは何なのか・・・。俺はペットの類かと目星をつけ
て彼女に聞いてみたの
だが・・・・・・。
途端に彼女の瞳から涙が零れた。
（しまったっ、）
これはまずい、とにかくまずい。女性を泣かせたり、怒らせたりす
ると後がひどいこと
を俺は知っている。主に空腹王とか、あかいあくまとか・・・・・・
それに・・・正義の味方を目指して守護者にまでなった俺が、目の
前の少女一人笑顔にで
きないでどうするっ！俺は彼女を見つめ、こう言った。
「冗談だ」
「ほぇ？」
「ひっかかったな、未熟者め！」

と笑い飛ばす。彼女は、おそらくインデックスという名なのだろう。

「俺がインデックスのことを忘れるわけないだろ？」

「・・・・・・」

「どうかしたか？」

「あれ？とうま、脳細胞が吹っ飛んで全部忘れたんじゃ・・・」

「なんか、忘れてた方がよかったみたいな言い方だな、おい」

「ふぇ？だって・・・」

「あのカエル顔の医者の話じゃ脳細胞が破壊されてるらしいな。だったら記憶喪失に

なってしまうはずだったと？」

「はず・・・だった？」

「つまり、そのダメージも魔術なのだろう？なら、話は簡単だ。自分自身に向けてイマジ

ンブレイカーを使えばいいだけだ」

「イマジン・・・ブレイカー？」

「俺の右手のことだ。ようはダメージが届く前に消してしまったということさ」

「・・・・・・」

「だいだい、普段は散々振り回してくれるくせに・・・まぁ、今回のことで少しは自分を

見直せたのではないか？」

そういって振り返ると阿修羅の如き形相をしたインデックスがいた。

「あ、あの・・・インデックスさ「ガブッ」ん」

「な、なんでさーー」

数分後、怒って出て行ったインデックスのかわりにカエル先生が入ってきた。

「ありゃー、これはひどいねー」

ベッドには身体中、歯形だらけの俺がいる。

「死ぬ・・・ほんとに死ぬ・・・」

先生は大きくため息をつくと、こう切り出した。

「けど、あれでよかったのかい？」

「・・・・・・」

「君、本当は何も覚えていないんだろう？確かに、あの事件のことは二人に聞いたまま

を伝えたけど・・・」

「これは俺の性分です」

と苦笑しつつ答える。

「それに・・・あの子に泣いて欲しくないって感じたんです。少しぐらいは残ってるんじ

ゃないですか？記憶」

「君の思い出は脳細胞ごと死んでいる。脳には情報は残っていないはずなんだけど・・・

なら、一体何処に思い出が残っていると言うんだい？」

「・・・俺の体と心、じゃないですか？」

〔学園都市のとある一室〕

そこは広い部屋だ。まるでネ●フ本部のダミープラグプラントのようだ。部屋の中心には水槽があり、何

かが漂っている。

「ステイル・マグヌス・・・ここに来た人間は皆、私のあり方を観測して、同じ反応をす

るのだが・・・機械にできることをわざわざ人間がすることはないだろう？」

「はい、アレイスター統括理事長・・・」

「君を英国から呼び戻した理由は既に分かっていると思うが・・・・・・まずいことにな

った・・・」

「ディープブラッド、ですね・・・」

「いるかどうかも分からない、とある生き物を殺すための能力を有する少女が監禁されて

いる。厄介なのは、本来、この街に立ち入ってはならない魔術師が関わったことだ」

「魔術師が？」

「魔術師の一人や二人、潰すのは容易い。問題はそういうところではなく、我々科学側が魔術師を倒し

てしまうという一点に尽きる」

「科学側と魔術側、お互いにそれぞれの技術を独占しているからこそ、今の世界のバランスがある・・・仮に超能力者を統べる学園都市が魔術師を倒すと言い張れば、どうなるかは明白だろう？」

「なるほど。魔術師の僕が魔術側の人間を潰す分には何の問題もない、ということですか？」

「ふむ、それに・・・魔術師にとっての天敵の一つになり得るものを私は所有している」

「イマジンブレイカー・・・ですが超能力者を使うのはまずいのでは？」

「問題ない。あれはレベル０。無能力者だ。」

――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――――――――――――

―――――――――――――――――――――

このときは、まだ誰も知らなかったのだ。イマジンブレイカーがその力を失っていることに。そして、

ある意味さらに厄介なものが彼と入れ替わっていることに。

つづく

＃2　再会？いいえ、はじめまして　（後書き）

なんか殆どそのままです。ごめんなさい。
次回からオリジナルな感じのシーンを入れたいと思ってます。

これからもお願いします。

あと、感想・アドバイス等送っていただけるとうれしいです。

#3　とある日常1（前書き）

どうも、オトモネです。
本日二回目の投稿になります。
皆さんが楽しんでいただければ幸いです。

＃3　とある日常１

＜エミヤｓｉｄｅ＞

退院を言い渡されて、俺はインデックスと共に自宅を目指していた。

なるほど、この街が数十年進んだ技術を有しているのは確からしい。

それは、先進的な都市設計からも見て取ることができる。

この数日の間、俺は自身の過去や、交友関係、超能力についてなど、調べられるだけのことを調べてい

た。それによると、この俺、エミ・・ではなく上条当麻はレベル０の高校生だと言うことだ。レベル０、

つまりは無能力者。学園都市の生徒たちは、有する能力に応じてレベルを付けられる。

現存する最高レベルは５。レベル５は７人しかいないらしいが・・・・・・。

それはそうと、人の中身が入れ替わって気がつかないものなのだろうか？時々口調が変則的になってしま

うときがあるが特に気がついた様子はなかった。もしや、世界の修正力が働いた結果なのだろうか？

だとすれば、修正力が俺に働いたわけではなく、俺に合わせて世界

が修正された、ということになる
が・・・。

「・・・うまっ、とうまっ！！」

おっと、少し考えに集中しすぎていたようだ。

「ん、どうかしたか？」

「もうお昼の時間なんだよ？っていうか何か食べたい！！」

隣を歩いている少女、インデックスはそういって子供のように騒いでいる。

まぁ、外見も十分に子供なのだが・・・。

「とうまっ、今何か失礼なことを考えてなかった？」

女性の感？の鋭さにはいつも驚かされている。これも、超能力の一種なのではないだろうか？

「そうだな、うちに帰って冷やし中華にでもするか・・・」

料理と言うにはいささか簡単だが、簡単だからこそ調理人の腕の差が出るものだ。

寮の近くのスーパーへ入った俺は、培ってきた心眼で食材を選び出す。

「とうまっ、もう我慢できないかも。私はもう、おなかがすいて倒れそうなんだよ？」

「まあ待て。食材選びは料理の基本だぞ？」

「もう、この間の残り物野菜炒めでいいから早くして欲しいんだよ！！」

「ほう、その言葉、後で後悔させてやる」

「？？？」

xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx
xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx
xxxxxxxxxxxxxxx

部屋の戻ると、俺は早速冷やし中華のスープ作りに取り掛かった。麺は市販のものだが、付属しているスープを使うつもりはない。ベースは和風だしだが、あまりさっぱりしていても物足りない。その調整は俺の腕次第だ。冷やし中華と平行して、インデックスが言っていた残り物野菜炒めとやらも作る。野菜が傷んでいるので、あまり期待はできなそうだが・・・。

テーブルに料理を並べるとインデックスはムクっと起き上がった。

「ほれ、御所望の野菜炒めだ。」

この俺にでさえ野菜の鮮度はカバーできないのだ。

よほどおなかがすいていたのか、そんな野菜炒めをもくもくと食べ

ている。

俺が何も食べていないことに気がついたのかインデックスは聞いてきた。

「とうま、どうかしたの？」

「いや、あと少しで麺が茹で上がるんでね・・・」

「麺？」

『ピピピッ』

「お、時間か」

そういって麺を鍋からあげると、平たい皿に盛り付けてゆく。

こうして「エミヤ・・・もとい、上条特製冷やし中華」が完成した。

材料や調理方法はとても単純だが、だしによって味は激変する。昨日のドラマで某高校生レストランの

先生もそういっていたしな。

「さて、では・・・いただきます」

思ったとおりの味に仕上がったようだ。うむ、旨い。
麺をすすっているとインデックスがこちらを見つめていた。
「どうした？野菜炒めはまだ残っているぞ？」
「・・・・・・・・・・」
「視線が痛い。睨むのをやめてくれ・・・」
「・・・・・・・・・」
「わかった、わかったから。ほれ、はよ食え」
「とうま？いまのは犬や猫にえさをあげるみたいで不愉快なんだよ！」
「じゃ、いらないか？」
「う～」
すると、インデックスは野菜炒めを俺に押し付け、冷やし中華を自分に引き寄せると、一口食べて、驚

いた顔をこちらに向けた。

「すふぉくおいひいんなお！！」

「口の中身がなくなってからしゃべりなさい」

「すごくおいしいんだよ！！よくよく思えば、野菜炒めの味も変わっていたし・・・とうま、どうかしちゃったの？？」

「その程度で驚いてもらっては困るな。次は言葉にできないくらい美味なものを作ってやろう。夕飯を楽しみにしておけ」

昼食の後には部屋の片づけをした。部屋にあった持ち物からして、上条当麻は本当にただの一般人だったのだろう。偶然巻き込まれたのかどうかは分からないが・・・。

数日前にカエル先生から聞いた話によると、俺の右手、「幻想殺し」は異能の力を打ち消すらしい。

対魔術師、対超能力者において、使い方次第では天敵となることもできよう。

だが、それは「上条当麻」であった頃の話だ。「今の上条当麻」はどちらかと言うまでもなく魔術サイドの人間だ。先ほど、調理の際に包丁の切れ味が悪く、つい普段の癖で投影してしまったが、

それによって投影が使えることがわかった。

以前、病院で自分の体を解析した際、魔術回路の数が27本になっていたのには唖然となってしまった。

昔の、遥か昔の自分に戻ってしまったようなものだ。これからは戦い方を少し変えねばならないだろう。

英霊であった頃の戦法では身が持たん。それに、「幻想殺し」が正しく機能するかは疑問だ。

「幻想を結び剣と成す魔術」が「幻想を打ち壊す能力」と共存できるとは思えない。

投影が使えたと言うことは、対を成す「幻想殺し」は使えないと考えたほうがいいだろう。

まぁ代用が利きそうなものが投影できるので、そこまで深刻に考え

てないが・・・。

「とうま！おやつ、食べたいな！」

空腹シスターが突然声を上げた。

「冷蔵庫にさっき作ったプリンがあるぞ」

そう聞くなり冷蔵庫のほうへ走っていく。本当に自分の欲求に忠実だな・・・

シスターだったんじゃないのか？

目の前でプリンを頬張る少女を見て、そんなことを思ったりした。

しかし、彼女が背負っている重荷か

らすればどうということはないだろう。

カエル先生に伝言をしていった二人の知り合いと言うのが気になるが、今はどうすることもできない。

この平穏を、彼女の安寧を守れるように俺は何をするべきなんだろうか？

俺がここにいることの意味は何だろうか？

なんやかんやで平和な日々が過ぎていった。

つづく

＃3　とある日常１（後書き）

次回はビリビリさんを出します。

感想、アドバイス等よろしくお願いします。

＃４　魔術師との出会い（前書き）

どうも、オトモネです。
投稿が遅れてすみませんでした。学校の課題とアルバイトの面接に追われてまして・・・
定期的に投稿できるようにがんばりたいと思います。
それでは、今回もよろしくお願いします。

＃4　魔術師との出会い

＜エミヤｓｉｄｅ＞

俺は今、インデックスと買い物に出かけている。自宅の食材が底をついたからである。
どうやら俺の料理、特に和食が気に入ったらしく、週の半分はご飯に味噌汁、焼き魚、あげだし・・・等のメニューが占めている。外食をしないのはいい事だ。健康のために、そして何より家計のために。

「ねえ、とうま」

「なんだ」

振り返ると、インデックスは立ち止まってアイス屋の看板を見つめていた。

「アイスが食べたいのか？なら、家で作っ「私はそんなこと一言もいってないんだよっ」・・・」

「もちろん、暑い、ダルい、ばてたなんて思ってもいないし、他人のお金でアイスを食べたいなんて微塵

も思ってないんだよ」

なんて分かりやすい子なんだろう。絶え間なく続けられているこのマシンガントークは全て彼女の本心だ、きっと。

「素直にアイスを食べたいと言えばよかろう」

「とうまっ、この服は主のご加護を視覚化したものであって、私は一度も暑苦しいとか、ああっうっとおしいと「わかったわかった」・・・」

「俺がアイス食べたいんだけど・・・」

「ちなみに、私は修行中の身だから一切の嗜好品の摂取は禁じられているんだよ」

「じゃ、やめとくか。無理して食べる必要もないし・・・」

そう言って歩き出すと、インデックスに肩をつかまれる。このちいさい体の何処にこんな力があるんだ？

「確かに禁じられているけれど、しかし、あくまで修行中の身なので完全なる振る舞いを見せるのは難しかったり、難しくなかったり。したがって、この場合、誤って口の中にアイスが放り込まれることも無き

にしも非ずなんだよ、とうま」

「つまり、おまえは俺に食べさせろと「ほっひょー」・・・何だ？」

見ると、青髪ピアスとアロハシャツの青年がこちらに近づいてきた。

あまり柄が良さそうではないが・・・

青髪「なかなかにステキな交渉中なんやけどな、かみや～ん」

アロハ「ちなみにその子誰ぜよ」

「？？？」

青髪「どうしたん？ポケーッとして。暑さにやられて記憶でもとんどるのかいな？」

「え？」

青髪「冗談やがな。そんなん不思議系電波少女の特権やで」

アロハ「で、実際誰ぜよ、そのちっこいの」

「もしかして女装少ねｎ「見つけたわよ」っへ？」

道の反対側から短髪の少女が走ってくる。中学生か？

アロハ「常盤台の超電磁砲（レールガン）ぜよ」

青髪「とりあえずパシャっと」

青髪ピアスが短髪少女の写真を撮るや否や、少女の体から電流が流れた。

青髪「うぉっ、いきなりなにすんのｙ・・・あ゛・・・・」

青髪の手には煙を噴いている携帯だったものがあった。

ビリビリ「なに勝手に撮ってるのよ・・・」

さらに大きな電流が辺りに流れていく。機嫌は悪そうだ。

青髪「土御門、一時撤退や！」

土御門「おう、青ピ。さっさと逃げるニャー」

「ちょっ、おまえら俺をおいて逃げる気か？」

土御門「達者でな、かみやん。生きていたらまた会おう！」

そして、二人は走り去っていった。俺とインデックス、ビリビリを

残して。
（まさか上条当麻にあんな悪友がいたなんて・・・状況から考えればこの少女も俺の知り合いか・・・）

「ちょっと、聞いてんの？」

「ん、すまない。少し考え事をしていた」

「今日は逃がさないわよ」

どうして上条当麻は問題を引き寄せてくるんだろう。さて、どうしたものか・・・。

「さて、ビリビ「御坂美琴よ」では、美琴。ちょっとお茶でもどうかな？」

「美琴って・・・／／／／／／なっ何言ってんのよ。あんたは・・・」

「そうなんだよ、とうま。とにかく私は早くアイスが食べたいんだよ」

・・・嗜好品の禁止はどうなったんだか・・・

「わかったわかった、さあ行こうか」

俺が歩き出すと二人がついてきた。それにしても、レールガンが知り合いとは。データによればレベル５

なのだとか・・・。そんなことを考えつつ、俺たちは近くにある某ハンバーガーショップを目指した。

＜御坂ｓｉｄｅ＞

どうしよう、お茶に誘われちゃった。

ただのお茶なのに私はとても緊張している。コイツはそうでもなさそうだけど・・・

ここから何か進展しちゃったらどうしよう？

なんて乙女の妄想に浸っていると同伴の男子、上条当麻が声を掛けてきた。

「えーと、美琴？」

「なっ何？／／／」

「どうかしたのか？さっきからぼーっとしているが」

「だっ大丈夫よ、なんでもないわ」

「シェイク、シェイク、シェイクが三つ。～♪」

あと、一人でシェイクを三つも持ってはしゃいでいるこの女の子はコイツの何なんだろう？

妹にしては髪とか瞳の色が違うし、修道服みたいなものを着てるし・・・。

女の子は先にテーブルのある二階に上がったようだ。今はレジの前で二人きり・・・。

（って何考えてんのよ、私。／／／）

自分でも顔が赤くなっているのが分かる。きっと、周りからはカップルのように見えｒ・・・

「そんなんじゃないわよ！！」

と、つい声に出してしまった。すごく恥ずかしい／／／／・・・

「美琴？大丈夫か？」

「なっなんでもないっていってるでしょ！！」

なんでこいつは私を名前で呼ぶのよ・・・。まっまた顔が／／／／／／／

「しかし、ずいぶんと混んでるな。別の店にすればよかったか？」

二階に上がると、どこも満席で座れそうも無かった。そういえば、あの子はどこに言ったのだろう。

「とうま！こっちだよ」

「よく空いていt・・・・・・」

こいつが眉をひそめている方向を見ると、例のシスターとテーブルに突っ伏した巫女装束の女性がいた。

＜エミヤｓｉｄｅ＞

俺の眼には、見慣れた腹ペコシスターと、見慣れぬ巫女装束の女性が映っている。ひとまず、巫女さんと呼称しようか。この巫女さんは、大量のハンバーガーの包み紙の脇で突っ伏している。明らかにトラブル臭のするいやな感じだ。

巫女「う、う～ん・・・」

「大丈夫か？」

巫女「く」

「く？どこか苦しいのか？」

巫女「食い倒れた・・・」

のーーーーーーーーーーーーーーーーん

そんな音が聞こえるような、いやな沈黙だった。

「で、なぜそんなに食べたんだ？そんなに腹が空いていたわけでもないだろうに・・・」

巫女「お徳用のクーポンがたくさんあったから、１コ１００円のハンバーガーを・・・とりあえず３０コほど頼んでみたり・・・」

ただのバカか？それとも・・・

巫女「自棄食い」

「は？」

巫女「・・・帰りの電車賃、６００円」

「ふむ」

巫女「・・・全財産、５００円」

「その心は？」

巫女「・・・買いすぎ、無計画」

「・・・・・・」

巫女「だから、自棄食い・・・」

「電車賃ぐらい誰かに借りられないのか？確か、交番でも最低限の交通費ぐらいは貸してくれるはずだが・・・」

巫女さんは、突然起き上がると俺のほうをじっと見つめる。美人の部類に入る顔だろう。しかし、なんだ？このプレッシャーは？

「なにかな？」

巫女「１００円、無理？」

「む」

墜ちたといっても私は英霊。正義の味方を目指した者だ。それぐらいで侮ってもらっては困るな。
そう内心で呟きながら、財布に手を伸ばす。
しかし、その動作は、インデックスによって止められた。

「とうまっ、見ず知らずの人にお金を貸すなんておかしいかも。詐欺かもしれないんだよ！！」

「本音は？」

「１００円あれば、お菓子をあと１つ買えるんだよ！！」

ん、正直でよろしい。

「君はシスターなんだろう？汝の持てるパンを分け与えよ、という言葉を知らないのか？」

「むむむ・・・」

「とにかく、これは貸しておく。別に返してくれなくてもいいが・・・・・
ここではゆっくりできそうも無いな・・・よし、テイクアウトにしてもらうか？」

二人の連れは何も言わない。一人は頬を膨らませているし、もう一人はなんだか赤い・・・

「行くぞ、二人とも」

そういって俺たちは店を出た。

そのあと、歩きながらシェイクを飲み、２０分ほどして美琴とは別れた。去り際に、

「次にあったときこそ勝負してもらうから」

とか言っていたが、まあ放っといていいだろう。

今はインデックスと共に、家へと向かっている。夕食は何にしようかな？

何が良いか彼女に聞こうと横を向くと・・・

・・・あれ？いない・・・

「とうまとうま！！」

少し離れた街路樹の下に彼女はいた。

「ねえ、見て！ねえ！！」

「？」

「にゃー」

そこには、箱に入れられた猫がいた。

「捨て猫・・・か？」

「とうま・・・ねえ？」

何を言いたいのかはわかるさ。

「だめだ」

「とうまっ、私はまだ何も言ってないんだよ！！」

「飼うのはダメ！」

「むーーーなんで？どうしてスフィンクス飼っちゃいけないの？」

「学生寮はペット禁止だし、スフィンクスを・・・ん？・・・って早くも名前を付けるんじゃない！」

「やだーーー、飼う飼う飼う飼う！」

「ダメなものはダメだ。大体、生き物を飼うときにはその命に責任を持たなければならないんだ、って驚いて逃げてしまったじゃないか」

「とうまのせい！」

理不尽な・・・

「ジャパニーズシャミセンって猫の皮を剥いで貼り付けてるんでしょ？この国は猫に対してひどいことばっかり！！」

「それを言うならイギリスだって・・・ん？何だこれは？」

「何だろう？近くで魔力の流れが束ねられてる」

この子も気がついたか。

「属性は土、色彩は緑、この式はルーン？」

かつての上条当麻ならいざしらず、今の俺は魔術師だ。魔術の気配を感じることはできる。

「って待て、インデックス」

「誰かが魔法陣を仕掛けてるっぽい。とうまは先に帰ってて」

一人走っていってしまった。

「帰っててって言われてもな・・・っう」

次の瞬間、俺は違和感を感じていた。

「何だこれは？結界か？」

「わかってるじゃないか」

そこに一人の男が歩いてくる。
赤い髪にローブを着た男。

これがエミヤとステイルの出会いであった。

つづく

＃４　魔術師との出会い（後書き）

感想・アドバイス等をお願いします。

#5　対立（前書き）

どうも、オトモネです。
ただいまレイアウトについて勉強中です。
読みにくいかもしれませんが、ご了承ください。

それでは、今回もよろしくお願いします。

#5　対立

公園の一角で2人の男が向合っている。一人はボサボサな黒髪の少年、もう一人は赤髪でタバコをくわえている。

「俺に何か用か？」

少年が聞いた。現状では、敵なのか見方なのか分からないからだ。この少年、上条当麻は記憶喪失である。厳密には、記憶が無くなったのではなく他人の記憶が入り込んでしまったのであるが。

「久しぶりだね、上条当麻」

＜エミヤｓｉｄｅ＞

この男は誰だ？
まったく、上条当麻の顔の広さには感心するな。悪い意味で。
なにせ、魔術師と知り合いなんだからな。そういえば、俺は魔術師と闘っていたと
インデックスが言っていた。この男のことなのだろうか？

俺が沈黙していると、男はこう切り出した。

「フッ。挨拶もなしか・・・。うんうん、僕たちの関係はこうあるべきだ」

なにやら一人しゃべっている。そういえばインデックスは？まさか、こいつが俺の足止め役か？

「インデックスは？」

「あの子なら気にするな。魔力の流れを見つけて、調べに行っただけだろう」

この男はインデックスの知り合いか・・・それとも・・・

「もう一度聞くが、俺に何か用か？」

できるだけ温厚に、軽く話しかける。

男はそれが気に入らなかったのか、

「いちいち笑うな、ぶっ殺すぞ・・・」

と、いきなり炎の塊を俺に放ってきた。

ああ、敵か・・・

俺は思考を切り替えると、そっと呪文を呟き、黒と白の夫婦剣を思い浮かべた。

＜ステイルｓｉｄｅ＞

目の前の少年の言葉が気に入らなかったので、少し驚かせてやった。

幻想殺しがあるのだから問題なかろう。そう思っていたからこそ、ステイルは次の瞬間に起こったことに対応できなかった。

上条当麻は、どこからか取り出した双剣で私の炎を切り裂いたのだ。

彼は、更に間合いをつめてくる。速いっ。

それに、よく見れば彼の持っている剣は相当な魔力を帯びているではないか。

いったいどこで・・・

「フッ、考え事とは余裕だな」

背後から声が聞こえ、反射的に飛びのく。一瞬前まで私のいた所に剣が振り下ろされた。

こいつは本当に上条当麻なのか？

そういえば、幻想殺しを一度も使っていない・・・

「貴様、誰だ？」

相手は飄々としている。

「さっき自分で言っていただろう？上条ｔ「戯言はよせ」むっ」

「それに、その剣、魔力を帯びているな」

「それで？」

「幻想殺し（イマジンブレイカー）である貴様の右手が魔力を帯びたものを持てるはずが無い。

そもそも、そんなものをどこで手に入れた？」

「フッ」

「答えろ！貴様はｎ「答える義務は無い」・・・何？」

「答える義務は無い、と言った。」

いつの間にか、彼の手には剣ではなく弓が握られていた。

「お引取り願おうか」

こいつは上条当麻じゃない。このままでは、彼女が、インデックスが危ない。

「――――Ｉ　ａｍ　ｔｈｅ　ｂｏｎｅ　ｏｆ　ｍｙ　ｓｗｏｒｄ．
（我が骨子は捻じれ狂う）」

何か呪文のようなものが聞こえ、弓に矢が番えられる。
番えられた矢は、強烈な魔力の圧力を感じさせる。

本能で感じたのだ。これには勝てない、危険であると。

若干あわてていたからか、距離をとるときに、持っていた資料を落としてしまったが、気にしている
余裕は無い。なぜなら上条当麻（イマジンブレイカー）は・・・

「何だ、逃げるのか？・・・」

魔術師だったからだ。

〔上条宅〕

「とうま、こんな時間まで何をしていたのかな？」

家に帰ると、おなかが膨らんだインデックスが待っていた。

なにやらうれしそうである。

「ちょっとな。それで、そのおなかは・・・」

「うん、おなかはいっぱいかも」

見ているとおなかの膨らみはモゾモゾ動き、胸まで上がった。

「少し見ない間に立派になったな・・・」

「育ち盛りだかｒ「にゃー」！！」

俺は呆れて何も言えない・・・

「ねえ、とうま・・・」

「・・・・・・」

「とうま！！」

「わかった。ただし、外に出すなよ？見つかったら面倒だ」

「うん！」

うれしそうな顔をしたインデックス。それは大いに結構だが、ペットの維持費とかを考えると頭が痛くなりそうだ。

「～♪　あれ？その封筒は何？」

手にした封筒に目が行ったようだ。

「ん？課題のコピーだ。仲間にコピーしてもらったんだよ」

無論ウソだ。この内容についてはもう少し検討する必要があるからな。

３０分前・・・

あのあと、魔術師は逃げていった。

吸血殺（ディープブラッド）しなるものが監禁されていると記されている

この資料を残して・・・・・・

づく

っ

#5　対立（後書き）

アドバイス、感想をお願いします。

#6　客人（前書き）

投稿遅れてごめんなさい。
レポートの山で死にそうです・・・

#6　客人

とある学生寮の前に、一人の女性がたっている。Tシャツとジーンズという服装で、ジーンズの片方は太腿の際どい所まで切断して露出している。腰には長い刀が差されていて、それを握る手には力が込められている。
そう、彼女は憤っているのだ。大切な友人を、枷から開放した人物が魔術師であったことに。そして、それに気がつかなかった己の不甲斐無さに。

〔上条宅〕

テーブルに並ぶ、料理の数々。それを見て口から何かを垂らすインデックス。ここ最近の、いつもの風景だった。彼女は、来てからまだ少ししか経ってないが、慣れ親しんだ自分の家のように寛いでいる。
「とうまっ、ごはんまだ？」

「ん、あと少しだ。もう少しで完成する」

インデックスが、待ちきれないとばかりに箸をカチカチ鳴らしている。行儀が悪いぞ聖職者（シスター）・・・
「もう終わるから、箸をk「ピンポーン」ん？こんな時間に客か？」きっと、いつものように土御門だろう。たびたび家に来ては、一緒に食事しているからな。
「今開けるからちょっと待て」

そういって扉を開けると、そこには知らない女性が立っていた。

＜神裂ｓｉｄｅ＞
チャイムを鳴らして扉が開けられると、そこにはエプロンを着けた男性が立っていました。なにやらいい香りがしていますが、食事の時間だったのでしょうか？
「なにか御用ですか？」

「あの・・・お時間をいただけますか？あなたには聞きたい事がある」

「・・・・・・」
いきなり警戒させてしまったのか、上条当麻は黙ってしまいました。
「えーと、今はちょっ「とうまっ！いつまで待たせるんだよ？」はあ・・・」
彼は溜息をつくとこちらを向くと
「立ち話もなんですから、中で話しませんか？」
どうしましょうか？いえ、ちょうどいいかも知れません。
「ええ、お邪魔します」

部屋の中は、十代の男性が住んでいるとは思えないほど清潔でした。
奥へ進むと料理が並んだテーブルがあり、それを見つめるインデックスがいました。
料理に夢中になっているらしく、私を見ても何も言いません。それが少し寂しかったり・・・
「夕食はまだだろう？」

「ですが・・・」

「なに、量は十分ある。気にせず食べてくれ」
あとから考えれば、なんて無謀な行為だったのかと思います。得体の知れない男の家に行き、共に食事をするなど・・・
「では、いただきます・・・」
鯖の味噌煮を食べてみて驚きました。これは缶詰の味じゃない。どうやら手作りのようです。外見からは料理ができるなんて思わなかったのですが・・・
みると、彼は私のほうを見て微笑んでいました。
「／／／／／なっなんですか？」

「いや、感想を聞こうと思ったのだが、どうやら聞くまでもないようだな」

「ほってもおいひいんたお」

「口の中が空になってからしゃべりなさい」
すると、インデックスは頬を膨らませて、
「とうま？最近私の扱いがひどいんだよ？」

「そんなことはないだろう？」
「ううん、私のことを子ども扱いしすぎかも！」
「実際子供だろう？小さいし」
「ムキーッ！もう私は立派なレディーなんだよ？」
「フッ、自分で立派と言っている時点で程度が知れるな？」
「・・・・・・」
「ん？ああ、自分が子供だとわかったｋ「ガブッ」・・・なんでさー！」

「あの・・・大丈夫ですか？上条当麻？」
「・・・・・・」
「あの・・・」
「ああ、すまない。いつものことだ。気にしないでくれ」
「とうま？それじゃあ私がいつも噛み付いてるように思われるんだ

よ？」

「事実だろう？」
また繰り返しのようです。埒が明きませんね・・・

「あのっ！！！」
大きな声を出したせいか二人は黙ってこちらを向きました。
「本当にすまない。で、何かな？」

「上条当麻、あなたに聞きたい事があります。」

「・・・どうぞ」

「・・・・・・」

「どうしたのかな？」

「あなたは・・・・・・魔術師ですね？」

＜エミヤｓｉｄｅ＞
また土御門が来たのかと思えば、来訪者は知らない女性だった。
随分きわどい格好をしているがファッションだろうか？一つ言えることは、奇抜な格好で俺の前に現れた奴は大抵俺の知り合いだということだ。きっとこの女性もそうだろう。

なにやら話があるとのことだが・・・
後ろで空腹シスターが騒いでいる。話なら早く済ませたいのだが・・・
女性の様子からするとそうはいかなそうだ。それに、彼女からは魔力を感じる。あの男の仲間だろうか？
まあ、ココではなんだし、中に入ってもらうとするか？
それを伝えると、彼女は一瞬躊躇いを見せたが直ぐに承諾した。
正直、驚いてしまった。女性が知らない男の家に入るなんて・・・
いや、もしかすると、彼女は上条当麻と親しいのではないか？
あいにく俺には記憶がないので憶測の域を出ないのだが・・・
なんやかんやで箸はすすんでいく。
どうやら彼女の口にあったようだ。
インデックスは・・・というと、まあ、言うまでもないだろう。

「あのっ！！！」
不意に話しかけられて、俺とインデックスの会話は中断する。
「本当にすまない。で、何かな？」
無論聞かれることなどわかっている。
「・・・・・・」

「どうしたのかな？」

「あなたは・・・・・魔術師ですね？」
はあ、やはりな・・・・・・

「なぜ、そう思うのかな？」
一応聞いてみるか？
「私にも報告が来ています。私も必要悪（ネセサリウス）の教会の一員ですから」

必要悪か・・・読んで字のごとく、暗部組織のことだろう。

「君の名前は・・・神裂・・・でいいんだよな？」

「そうですが・・・なにか？」

カエル先生が言っていた二人とは彼女たちのことか・・・

大方、もう一人はこの前の奴だろう。

「いや、なんでもない。続けてくれ」

「？　まあ、いいでしょう。それで、あなたが魔術師だった件についてですが・・・」

「まってほしいかも」

「「？？」」

「とうまからは魔力を感じないんだよ？」

「ですが、報告では・・・」

「能力者かもしれないとは考えなかったのか？」

「ええ、あなたはレベル０ですから」

「フッ、はっきり言ってくれる・・・」

「気を悪くしたなら謝罪します」

「いや、結構だ。だが、そこまで調べてあるのなら、俺と魔術(そちら側)に接点が無いということもわかるはずだが？」

「だからこそ、私が調べにきたのです。事の真偽を確かめるために・

・・」
そして黙ってしまった。彼女としても理解できないのだろう。フム、どうしたものか・・・
しばらくたってから、俺は口を開いた。
「結論から言えば・・・」
ビクッと二人がこちらを向いた。
「結論から言えば、俺は魔術師ではない」
「・・・・・・」
「答えが気に入らないかな？」
「では、あなたは何だというのですか？レベル０の上条当麻！！」
俺が何であるのか、いや、何でありたいのかなど、あの頃から決まっている。
少し恥ずかしかったが、それでもしっかり噛み締めるようにこう言った。
「正義の・・・味方さ」

つづく

#6　客人（後書き）

当分は不定期の投稿になりそうですがご了承ください。（ゴメンナサイ）

読んでくださった方、ありがとうございました。
これからもよろしくお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2140t/

とある魔術使いと禁書目録

2011年6月4日21時57分発行